

第39回北海道麦作共励会審査報告

平成30年度の第39回北海道麦作共励会の出展者の麦づくりおよび審査結果の概要について審査委員を代表して報告申し上げます。

平成30年産の秋まき小麦は、10 a 当たり収量422kgで前年対比79%、平年対比でも88%と下回りました。

春まき小麦では、10 a 当たり収量208kgで前年対比69%、平年対比でも65%と大きく下回りました。

全道の収穫量は、約47万トン、当初約54万トンの収穫量を見込んでいましたので計画対比89%の収穫となりました。作付面積は、約12万haで前年対比100%でした。

一方、品質面では秋まき小麦の1等麦比率が約80%となり、平成28年に次ぐ割合となりました。また、基幹品種である「きたほなみ」の品質ランク区分では、地域間差はあるもののタンパク含有率を除き外はクリアできました。

秋まき小麦の収量が平年を下回った要因として、出穂期以降の降雨と日照不足が大きく影響し、加えて成熟期の高温により登熟が進み、細麦傾向になったものと思われれます。

また、春まき小麦では、成熟期以降の降雨と最低気温の低下により穂発芽や低アミロの被害を受け1等麦比率は45%となりました。

次に麦作共励会の経過について申し上げます。8月6日に第1回審査委員会を開き、8月20日付けで各関係機関・団体に、後援依頼と参加推進をお願いしました。

秋まき小麦では、全道的に平年を下回る作柄となったものの関係者の協力で今年度は6点の出展となりました。6点の内訳は、第1部（畑地における秋まき小麦）個人で2点、同集団で2点。第2部（水田転換畑における秋まき小麦）個人で1点、第3部（全道における春播き小麦）個人で1点でした。

11月5日に第2回審査委員会を開き、推薦調書を基に審査を行い、部門毎の賞を選考しました。その後、12月6日までに現地調査を行い、正式に各賞を決定しました。

以下、最優秀賞者の麦づくりの概要について紹介します。

【畑地における秋まき小麦・個人】部門

音更町の馬淵圭佑氏は、祖父と共に畑作専業経営を行っています。約30haの畑地に小麦、大豆、小豆、ばれいしょ、直播てんさい、加工用スイートコーンなどを栽培しています。

平成30年産の収量は10俵で、過去2年の平均でも12俵を超える安定した収量でした。

等級も全量1等、ランク区分も基準値内と申し分のない小麦です。

安定生産を達成している麦づくりの要因として、小麦の前作として加工用スイートコーンを導入し、適期播種による輪作体系に努めています。また、過繁茂を避け受光態勢を良くするために、融雪後の起生期追肥を控え、茎数に応じた幼穂形成期以降の窒素追肥を重点に行っています。

【水田転換畑における秋まき小麦・個人】部門

岩見沢市の大槻氏は、水田+畑作+花きの複合経営農家です。経営面積は約23haで、内水田面積は12haです。

平成30年産の収量は、9.7俵で、過去2年の平均収量でも11.5俵と地区平均を大きく上回る高い収量です。

安定生産を達成している小麦づくりの要因として、小麦の連作回避のために田畑輪換を行い、さらにはなたねの栽培にも取り組んでいます。

また、小麦栽培の前にはサブソイラーによる心土破碎と作土層にスタブルカルチを深めに施工するなどの排水対策に努力しています。

現在、JAいわみざわ青年部長を務め若手農業者の中心的役割を担っています。

【畑地における秋まき小麦・集団】部門

女満別町麦作振興協議会は、大空町女満別全域をカバーする地域にあって昭和62年に設立し、JAめまんべつの小麦耕作者全戸で構成されています。

経営面積は約7,420haで、内小麦面積は1,788haです。

平成30年産の収量は、約10俵で全道の平均を上回る収量でした。

JAめまんべつは、道内でも有数の種子生産地帯であるため、健全種子生産の責任を負っています。特に、収穫時期には11の地区ごとの麦作集団が52台のコンバインを地域の垣根を越えてフル活用して、高品質で安定した生産を目指しています。

【春まき小麦における全道一円・個人】部門

倶知安町の有限会社中崎農場は、畑作専門経営です。畑の耕地面積は、55haと地域の中でも大規模で、春・秋まき小麦、てんさい、大豆、ばれいしょを栽培しています。

平成30年産の収量は、4.6俵と平年に比べ低収でしたが全道平均の1.3倍となりました。また、1～2等麦比率は67%の成績でした。

羊蹄山ろくの豪雪地帯でありながら、早期播種を実現するために、融雪剤散布の実施や翌年の小麦畑には、事前にハーフソイラーを使用するなどして透排水性を高める工夫をしています。

また、春の耕起ではパワーハロ1回で碎土・整地を行い土壌に負荷をかけないように工夫しています。

以上のように、それぞれ受賞された皆さんは、輪作体系を守り、透・排水性対策に腐心し、きめ細かな肥培管理に心がけています。

また受賞された皆さんは地域の仲間を大切に、地域のすばらしい牽引力となっています。これまでのご努力に敬意を表するとともに、この度の受賞を心からお祝い申し上げたいと思います。

最後に本年度の麦作共励会に関係された皆さんにお礼申し上げるとともに、今後とも北海道の麦作振興に尽力されることをご祈念し審査報告と致します。

第39回（平成30年度）北海道麦作共励会審査委員長

北海道農業研究センター作物開発研究領域長 川口 健太郎